

教材研究：「更級日記」

— 物語耽読を中心に —

下 出 博 子

I はじめに

「更級日記」は、昭和38年以降、「古典乙Ⅰ」、「古典Ⅰ乙」の教科書において比較的採録率の高い作品である。「古典乙Ⅰ」「古典Ⅰ乙」で比較すると、「古典Ⅰ乙」では、採録箇所数は減少し、しかもその採録箇所は、冒頭の「かどで」、上京後の「物語耽読」、この2箇所集中している傾向が見られる。

古典としての古文指導の際、教材とする作品選択にあたっては、それが古典教育の理念にかなった¹⁾教材化ができるか否か、ということが大きな基準となるであろうが、それと同時に、学習者の進度に合った比較的言語抵抗の少ないもの、今後古文を読むにあたって役にたつ文法事項の基礎を学習するのにふさわしいもの、学習者が興味・関心をもつことができるもの、などの点も選択基準となるであろう。また、考慮すべき点の一つとして、²⁾「作品のいのち」に触れさせるような配慮をすること、つまり、その作品の特質を把握した教材化がなされなくてはならないという点もあげられる。

これらの点を考慮にいれながら、「更級日記」の教材化について考えてみたい。

II 「更級日記」作品の特質

作者は、十歳頃、上総介として任地に向かった父に伴われてあづまに下り、そこで数年を過ごし、十三歳の時、家族と一緒に上京することになった。日記は、そこから筆が起こされている。日記執筆時（晩年に近いころ）の作者にとって、この上京は言わば「等二の誕生」であったと思われるのであろう。自分の人生の出発点をここにおいていたため、ここを日記の起筆としたと考えられる。

上総において培われてきた、物語を読みたいと思う心は、上京と同時にますます強まっていく。幸いなことに、おばから源氏物語やそのほかのいくつかの物語を贈られ、それらを読みふけることができた。そして、このように物語を読みふけることによって彼女は自分の生き方の理想像を形成していった。ところが、現実はその理想とは大きく違うものであり、彼女がつくりあげていった理想像は徐々に壊されていった。彼女は現実の虚しさを痛感し、物詣でに没頭し、過去を悔いながらも後の世に救われることだけを頼みに余生を送るようになる。

日記の梗概は以上のとおりである。

日記執筆の動機及び主題に関する事柄については、「自らの生涯を悔恨の情を持って描こうとしたもの。」という³⁾中田秀夫氏の説をはじめ、⁴⁾宮崎荘平氏も、自叙構成の契機として「悔恨」を

あげている。

たしかに、この日記は作者が自分の一生を回想して書いたものであるし、晩年の心情から過去を「悔恨」して書き記したものである。それは本文「いかばかりかはあやしかりけむを」「まづいとはかなくあさまし」といったことばから読みとることができる。

けれども、この日記には「悔恨の情」ばかりが満ちているのではないと考えられるのである。

この日記は、作者が阿弥陀仏の夢を見て、その夢を、来世は救われることの夢告であると信じその夢に望みを託すところがその終結部となっている。

⁵⁾天喜三年十月十三日の夜の夢に、ゐたる所の屋のつまの庭に、阿弥陀仏たち給へり…中略…この夢許ぞ、後の頼みとしける。

夢の記事の直前に、この日記の中で最も端的に「悔恨の情」の表われているとみられる記事がある。

昔より、よしなき物語、歌のことをのみ心にしめて、夜書思ひて、をこなひをせましかば、いとかかる夢の世をば見ずもやあらまし。初瀬にて、前のたび、稲荷より賜ふしるしの杉よとて、投げいでられしを、出でしまゝに稲荷に詣でたらましかば、かからずやあらまし。

物語や歌にばかり夢中になっていて、仏道修業や参詣などを熱心に行わなかったことに対する後悔を、「をこなひをせましかば……見ずもやあらまし」「詣でたらましかば……かからずやあらまし」と、同じ表現を二度繰り返して用いている。ここに強い悔恨の情を読むことができる。

ところで、これほど強い悔恨の念を持っているにもかかわらず、この日記の作者は、この世の虚しさや後悔の思いばかりを書き連ねるだけではなく、悔やむ一方で、その自分の過去の行為について、その時点での感情・感動をそのままに描いているのである。この点はこの日記独自のものとして重要な点であると考えられる。

「蜻蛉日記」の中には次のような記述がある。

⁶⁾世中におほかるふるものがたりのはしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり

「蜻蛉日記」の作者は現実の自分の生活をふり返ってみて、物語は「そらごとだにあり」と述べ、「そらごと」ではないことを書き記そうとするこの日記執筆にあたっての出発点となる意識が記されている。

一方、「更級日記」の作者は、晩年になると、物語のことを「よしなき物語」と言い、信ずるに足るものではないと思ひ至ってはいるが「蜻蛉日記」の作者のように、物語に対して否定的な考えをもつのではなく、物語に対して、夢やあこがれを抱いていたころの心の動き、物語の世界に浸っていたころのようすをその当時のままに、あるいはいささかの美化の加わったままに描いているのである。

自分の一生を、悔恨の情をもって描いている、ということと同時に、上に述べたように、少女時代の行為や感情などについて、日記執筆時の作者の考え方によって変えることなく、当時のままに描いている、という点もこの日記の特質の一つであると考えられる。

古典学習を始める際、生徒の中には、なぜ古文を学習しなくてはならないのかという疑問を持

つ者も見られる。そのような疑問を抱く生徒は、古典学習の意義を問うよりも、千年近く前を自ら解釈していく為の一つの指針としての効果があるのではないかと、そして同時に、生徒の興味・関心を喚起することができるのではないかと考える。

先にあげた作品の特質をも考え合わせ、ここでは「物語耽読」を中心とした「更級日記」教材化を試みる。

Ⅲ 教材・指導上の留意点

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心ぐるしがりて、母、物語などもとめて見せ給ふに、げにをのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、つづきの見まほしくおぼゆれど、人かたらひなどもえせず。誰もいまだ都なれぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ」と心の内に祈る。親の太秦に籠り給へるにも、こと事なく、この事を申して、いでむまにこの物語見はてむと思へど、見えず。いと口おしく思ひ歎かるるに、をばなる人のゐ中よりのぼりたる所にわたいたれば、「いとうつくしう、生いなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るには「何をか奉らむ、まめまめしき物は、まさなかりけむ、ゆかしく給ふるなるものを奉らむ」とて、源氏の五十余巻、ひつに入りながら、ざい中将、とをぎみ、せり河・しらら・あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得て帰る心地の嬉しさぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、木ちやうのうちうち臥してひき出でつつ見る心地、後のくらひも何にかはせむ。書は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかの事なければ、をのづからなどは、空におぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、愛にいと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五巻をとくならへ」といふと見れど、人にも語らず、ならはむとも思ひかけず、物語の事をのみ心にしめて、われはこのごろわろきぞかし、盛りにならば、容貌もかぎりなくよく髪もいみじく長くなりなむ。光るの源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

◎ かくのみ

「かく」は「このように」との現代語訳がされるわけだが、そのさし示す内容がどんなことであるか、説明がされなくてはならない。教科書ではどのような説明がなされているか、いくつかの例をあげてみる。

- ・継母との離別、乳母の死など、わびしい事件が連続した。
- ・作者の乳母の死や、習字の手本を書いた藤原行成の娘の死を聞いて悲しんだこと、
- ・「かく」に関する説明のないもの

説明のないものは別として、前にあげた二例のような説明があったならば、授業の場で、「かく」を文法的に説明するだけで終わってしまうということがなくてすむであろうが、ここに記されている説明だけではやや不十分であろう。

なぜ作者が「思ひくんじ」ていたのかと言えば、継母が去ってしまったこと、乳母が亡くなり

そして侍従の大納言の御むすめが亡くなる、など悲しいでき事が続いたからである。これらの悲しいでき事に直面して、作者がどのように悲しんだのか、先にあげた教科書の説明は、ここにふれていないのである。

乳母が亡くなった際の彼女の悲しみは「せむ方なく思ひ歎くに、物語のゆかしさもおぼえずなりぬ。いみじく泣きくらして…」と記されており、また「侍従の大納言の御むすめなくなり給ひし時には、自分の悲しい思いと比べて「殿の中将」(侍従の大納言の御むすめの夫)の「おぼし歎くなるさま」を思いやっており、姫君にもらった「御て」を見ては「いとど涙を添へまさる」姿が記されている。作者の悲しみ方は、あれほど読みたがっていた物語だけれど「物語のゆかしさもおぼえずなりぬ」といった様子なのである。これらのことが「かく」の示す内容なのである。先の二例の説明は誤りではないが、作者の性格把握のための手がかりにもなるであろう作者の感情を記している「かく」の示す箇所表現に対する配慮が望まれる。

◎ 心も慰めむと、心ぐるしがりて、母、物語などもとめて見せ給ふに

「心も慰めむ」この「心」は作者の心であり、「心ぐるしがりて」の「心」は作者の母の心である。このような説明を要する箇所はその説明だけに気をとられ、書かれている内容についての注意が欠如しがちであるが、数々の悲しみにあって「思ひくんじたる」作者の心情に対する母の思いやりの心に気づくことも忘れてはならない。また、作者がこの箇所のように、母親の娘に対する思いやりの心を記すことができたのは、執筆時において作者自身が母親になっており、より一層母親の心が感じられるようになっていたからであるということも考えられるであろう。

◎ いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆる

作品の冒頭の「かどで」の箇所に見られた「いかで見ばや」「いとどゆかしさまされど」「いみじく心もとなきままに」といった表現を受けて、ここでもそれと似た表現が繰り返しのように入れられているところに、物語を読みたいと思う気持ちが一層高まっていくものの、読めないことに対する作者のもどかしい思いが表されている。

◎ はしるはしる、わずかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、木ちやうの内にうちふしてひき出でつつ見る心地、後のくらひも何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかの事なれば…。

「をばなる人」から物語を贈られ、それを讀むことのできるうれしさと、物語を讀みふける姿が描かれている。一人で、人と離れた所で讀み、夢中になって物語の中の世界に入っていくようである。「かどで」の箇所において「人まにみそかに入りつつ」「人まにはまいりつつ」

薬師仏に祈るに際し、このように人のいない折を見はからって人にさとられないように祈り悲しくて泣くにしても人に知られないように泣いているのである。が、人がいないとなると薬師仏の前で「身を捨てて額をつき」全身全霊をこめて祈っている。このことと似た行動様式がこの物語耽読においてもとられているのである。

「後のくらひも何にかはせむ」この言葉から、作者のその頃の価値感や物語を讀むうれしさを知ることができる。後は女にとって最高の位であるが、受領の娘にとってはほど遠く、ほとんど不可

能な地位である。その最高の位と物語を読み暮らす気持ちとを比べているところから、物語を読み耽ることが彼女にとってどれほどうれしいことであったかを感じることができる。

◎ われはこのごろわろきぞかし、盛りにならず、容貌もかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ。光るの源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ…

物語耽読によって形成していった彼女のあこがれがこれである。このような態度に対し⁶⁾、「現実の生活と物語の世界との間にけぢめをおくことも考へなかつたし、知りもしなかつた」と、現実と虚構との区別がついていないとする見方もあるが、物語の読者として、しかも少女としてこのような気持ちをもつのはごく自然な態度なのではないか。ここに作者の少女時代の真率なる気持ちが述べられているのである。

「源氏物語」の中には、さまざまな女性像が描かれている。その中から作者は、自分の生きる上での理想像として「夕顔」や「浮舟」⁷⁾とくに「浮舟」を思い描いている。その理由として⁸⁾今井卓爾氏は次のように述べている「浮舟は陸奥守で後に常陸介になった人の継子であるし、孝標女は上総介で後に同じく常陸介になった人の実子である。浮舟は継父と実母と共に東国で人となり、孝標女は実父と継母と共に東国で幼時の若干を過した。かういふ境遇上の類似が浮舟への傾倒を刺激したものであらう」「浮舟」のようになりたいと願う心はあこがれには違いないが、受領の娘である作者にとって后になるといったような実現のむづかしい、大それた夢幻ではない。運が良ければ、そして事がうまく運べば実現可能である理想を「浮舟」の生き方に置いているのである。

◎ いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光る源氏などのやうにおはせむ人を年に一たびにても通はし奉りて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ

作者の理想とする生き方はここに描かれている。物語の女主人公そのままではなく、物語の中から自分なりの理想像を改めて作りあげている点もうかがえる。この理想像は華々しいものではない。将来自分の身の上がうまくゆけばこうなるかもしれないと考え得る範囲のことなのである。このように、物語耽読の生活は、作者に、女としての生き方の理想像を形成させていった。

◎ まづいとはかなくあさまし

この自嘲めいたことばで今まで述べてきたことを否定している。日記執筆時における悔恨の情が表れている箇所である。

以上述べてきたように、この「物語耽読」の箇所は、自分が少女時代に形成していった女の生き方の理想像に対し、日記執筆時の「まづいとはかなくあさまし」という悔恨の意識が強く表されている箇所である。

それと同時に、少女時代に物語を読んでいた頃の楽しさ、そしてそれによって形成していった理想像のことをその当時の感情のままに描いている箇所でもある。

結婚後、彼女は次のように記している。

光る源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは。かほる大将の宇治に隠しすへ給ふべきもな

き世なり。

物語耽読によって形成していった自分の生き方の理想像が年を重ねていくうちに徐々にくずされていった。結婚後も⁹⁾「さりとしてそのありさまの、たちまちにきらきらしき勢ひなどあんべいやうもなく…」といったようすであった。この理想と現実との差の大きさに気づいたときの思いが、上にあげた箇所⁸⁾に述べられているのである。この箇所にふれることによって「まづいとはかなくあさまし」ということばに表された悔恨の思いがいっそう具体的に把握できるのではないだろうか。

Ⅳ おわりに

古文作品を学習するにあたって言語抵抗の少ないものから入ることであるから、ある作品を教材として学習しておくことを、次の作品を読む上での一段階として位置づけるということは当然のことであろう。しかし、ある作品を、より言語抵抗の大きい次の作品を読むための予備段階の教材とするにしても、次の段階へ進むための手段として文法事項の理解のみを目的としてしまうような扱い方をするのではなく、作品の特質をおさえた教材化がなされなくてはならないと考える。

〈注〉

1. ここで教材化というのは、作品の中からの箇所選択、そしてそれらの指導法を含め、実際に生徒に示す形になることを意味する。
2. 仲田庸幸「古典の教材研究」(国語教育教材研究論)では「教材のいのち」、宮崎荘平「王朝日記文学の教材性」では「作品のいのち」ということばがそれぞれ用いられている。
3. 中田秀夫「更級日記執筆時の動機と主題」(蜻蛉日記と更級日記)
4. 宮崎荘平「更級日記の構造」(平安朝女流日記文学の研究)
5. 更級日記本文は日本古典文学大系本による
6. 蜻蛉日記本文は日本古典文学大系本による
7. 「夕顔」については2箇所⁸⁾に記されており、「浮舟」については「宇治の大将の浮舟の女君のやうに「浮舟の女君の、かかる所にやありけむ」という箇所に記されていることから。
8. 今井卓爾「更級日記」(平安朝日記の研究)
9. 体系本においてこの箇所の頭注には、宮仕えに出たときのことについて述べたところであるとなっているが、「籠めすへつ」を結婚することと解釈し、その直後にこの記述があることからこれは結婚に対する作者の感想であるとする。